

失礼な「テオク」について —「テオク」の級外下位ポイントに着目して— 井上直美

本研究は、他者とのやりとりの中で用いられる「テオク」が失礼さを生むことに注目し、日本語母語話者の会話コーパスの実例から、なぜ「テオク」が聞き手に失礼な印象を与えるのか、その仕組みについて考察したものである。

「テオク」の先行研究は、準備、処置、放置といった意味・用法を扱うものが多く、本研究と関わりの深い「聞き手の印象」について論じられたものは少数である。そして、「テオク」の聞き手の印象は、「丁寧さ」や「感じの良さ」などプラスの面が主として取り上げられており、「失礼さ」を中心に分析を行ったものは見られない。また、なぜ「テオク」は「丁寧さ」と「失礼さ」のように相反する印象を与えるのかについても言及されていない。

そこで、本研究では『名大会話コーパス』を用いて、a. 行為者は誰か、b. 誰のための行為か、c. 行為の場面はいつかという観点から「テオク」の使用実態を捉え直した。まず「a. 行為者×b. 誰のための行為か」の組み合わせを指針として用例を考察し、次にc. 行為の場面はいつかによって、特徴的な「テオク」の用いられ方をタイプ別にまとめた。

これらの調査、考察の結果、他者とのやりとりの中に現れる「テオク」は、「相手の事情や意向を察し考慮した行為だという意図を示す」ことがわかった。そのような意図をもって発せられた「テオク」は、聞き手が「意向を察してくれた」と感じれば、丁寧な印象になる一方で、あなたのための行為だと明示されることに対し、「恩着せがましい」「厚かましい」と感じた場合には、失礼さが生じるのである。

以上のように、話し手が会話のやりとりの中で相手の状況や意向を察し考慮したつもりで「テオク」を用いても、聞き手の認識とずれが生じた場合、「テオク」は失礼さを生む可能性がある。その点において「テオク」の失礼さと丁寧さは表裏一体だと結論付けられる。